オープンカレッジ

## 経済史からみた「明治150年」

# 見知らぬ社会に想像力を働かせる

名古屋経済大学
経済学部准教授
齋藤　邦明

今年2018年は、明治元年（1868年）からちょうど150年目の年に当たり、「明治150年」としてさまざまな行事や学術交流が催される。しかしながら、言うまでもなく、現代は明治の終わり（明治45年、1912年）から数えてもすでに100年以上が経過している。

つまり、この「明治150年」は、「明治は遠くなりにけり」と詠われたころや「明治100年」のように昔日を振り返るのではなく、現代を生きる私たちにとって、「見知らぬ」時代・社会への想像力を働かせるという行為となろう。

「想像力を働かせる」とはまさに「言うは易く、行うは難し」である。この小論では、異なる時代、異なる社会へ「想像力を働かせる」ことの難しさを一緒に体験してもらいながら、「明治150年」を考えてみたい。

まず、150年前の今日は、厳密には「明治」ではなく、「慶応」年間である。元号としての「明治」は10月より採用された。また、日本で太陽暦が導入されたのは明治5年（1872年）12月である。150年前の今日は天保暦（太陰太陽暦）で、慶応4年1～2月にあたる。このように、150年前と現在の日付を対照させるだけでも大変であることが分かる。

150年前の日本を一言で表すとどうなるであろうか。私の専門（経済史）の立場で答えるならば、それは「発展途上国」である。明治という時代は、日本史などの教科書で日本が近代化した時代であると書かれているため、西洋の文化や技術を導入して、日本が経済的にも社会的にも発展していくイメージをもっていると思うが、すべてが順調な歩みだったというわけではない。

発展途上国という言葉から連想されるイメージの一つは、生活の貧しさであろう。食を例にとってみよう。明治時代の人たちの主食について、現在刊行が進められている『愛知県史』の中に、「県下人民常食歩合表」（1885年＜明治18年＞12月）という史料が掲載されている。これによれば、名古屋の人は主食の90％が米で、10％が麦となっており、ほぼ米食であるのに対し、たとえば東春日井郡では主食の20％が米、50％が麦、続いて甘藷（かんしょ）（さつまいも）が10％、蔬菜（そさい）が10％、稗（ひえ）が5％、雑穀が5％となっており、麦をベースとした混食であったことがわかる。

ちなみに、日本国内の米の生産量のみで自給率が100％を超えたのは、明治時代よりだいぶ後の、1950年代に入ってからである。言い換えれば、近代日本は米をどのように確保するかということに苦心した社会であった。

「明治150年」の今日、明治時代の偉人や歴史的な出来事を振り返ることは、もちろん大きな意義がある。他方で、私がこの小論で意図したことは、当時を生きた人たちの生活に即して150年前を想像することにあった。「明治150年」の今年は、150年前の「私たち」に想像力を働かせつつ、現在の私たちの社会や生活を顧みる、格好の機会となることを期待したい。

**さいとう・くにあき**　日本経済史。東京大学大学院経済学研究科単位取得退学。博士（経済学）。1985年生まれ。